現地渡航レポート

作成者
上田 健翔
（フリーランス）

タイ・ラオス相互交流プログラム 実施報告

はじめに

訪問地： タイ（コンケン県）、ラオス（首都ビエンチャン、バンビエン、シェンクワン）
実施時期： 2026年3月

今回の渡航では、タイのコンケン、およびラオスのビエンチャン、バンビエン、シェンクワンを訪問し、タイとラオスの相互交流プログラムを実施しました。

主な目的は、コンケン県内の救急医療システムやレスキュー活動を行うチャリティーファンデーションとの関わりの深いコンケン病院（以下、KKH）を起点として、タイ側のレスキューに関する知見を集め、ラオス側と共有し、レスキュー組織の立ち上げ・持続可能性・発展について情報収集、および、意見交換を行うことです。これまで約1年半にわたり都市部（コンケン・ビエンチャン）で培ってきた交流と知見を基盤とし、今回からはいよいよ地方都市（バンビエン・シェンクワン）へ視点を広げました。都市部と地方都市の比較によって共通性や地域性、特殊性などを比較検証するために情報収集を行いました。

【ガソリン不足の影響】
渡航時にはガソリン不足の影響が深刻化しており、タイ・ラオス両国で給油所の一部閉鎖や給油待ちの長蛇の列が発生していました。特にラオス国内では約半数のガソリンスタンドが閉鎖していたため、当初予定していた地方都市バンビエンへの車両移動は、道中の給油不可による移動困難リスクを避けるため、ラオス高速鉄道の利用に切り替えました。現地バンビエンで移動車両手配の際も価格高騰の煽りを受けましたが代替手段を講じることで、計画通り安全に地方都市訪問を果たすことができました（シェンクワンでも車両手配の価格は高騰していました）。

＊ラオス・タイでの経験共有と意見交換

まずはタイのコンケン県にて、KKH1名が同行の上、現地でレスキュー活動を行う４つのレスキューチーム（都市部のSawang Rescue 59とRescue Jitkuson Foundation、都市部から車で１時間ほど離れた都市近郊部のNampong RescueとSarnjao Nampong Rescue）を訪問し、主に活動立ち上げ時の経験や知見などについて情報収集を行いました。ここでの活動が、ラオス側へ共有するための重要な起点となりました。

続いてラオスでは、まず首都ビエンチャンへ移動し、3つのレスキューチーム（1623、1625、1630）を訪問しました。ビエンチャンではKKHから6名（うちオブザーバー2名）が同行し、ラオス側の情報収集のみならず、コンケンでの知見をもとに、今後の発展、持続可能性に向けた活発な意見交換が行われました。都市部

での経験共有を経たのち、ラオス地方部との共通性や地域性などの比較検証に向けた情報収集のため、バンビエンを訪問しました。さらに、同じくラオス地方部のシェンクワンへ移動し、今後の両国の経験共有を地方展開するために、対象となる地方組織の現状と地域性に関する事前の情報収集が行われました。なお、シェンクワンでは交通事故現場を想定した危険予知トレーニングも行い、レスキューメンバーの実践的な安全意識の徹底と危険予知の再確認・向上を図りました。



コンケンのレスキューチーム
Sawang Rescue 59



ビエンチャンのレスキューチーム1625





バンビエンのレスキューチーム1623





シェンクワンのレスキューチーム1623

＊最後に

　本プログラムでは上記のレスキューチーム訪問に加え、ラオス全土でレスキューの地方展開を行うラオス赤十字の保健部長への訪問も実施し、幅広い視点から現地の救急医療・レスキュー体制の現状を把握しました。タイで培われた知見がラオスの都市部へ、そしてさらに地方都市へと波及していくプロセスを確認するとともに、それぞれの地域が抱える課題の共通項と相違点を明確にするための情報収集ができました。また、KKHからも両国で得た情報の共有に関する具体的な取り組み案が聞かれ、今後のさらなる両国のレスキュー体制の発展と持続可能性の向上に繋がる、大変有意義な相互交流プログラムとなりました。



ラオス赤十字保健部長への訪問



ラオス鉄道の待合エリアにて意見交換の様子